

第265回くらしの植物苑観察会 令和3年4月24日(土)

桜草の栽培史—江戸中期から幕末まで—

水田 大輝(日本大学生物資源学部 専任講師)

毎年、春先には何百とある園芸品種が私たちを楽しませてくれる桜草ですが、園芸品種が出現したのは江戸時代(中期以降)になってからです。元々、日本では四国と沖縄を除く全国に野生の桜草が自生しており、日本人にとって身近な植物でした。桜草の最も古い記録が残っているのは室町時代中期(文明年間:1469~1487)からで、以降、様々な書物に桜草が登場します。栽培や育種を通して人が桜草とどのように関わり、愛でてきたのかを、竹岡(2014)の分類に沿って紹介すると、第1期の室町中期~後期(文明年間~元亀年間:1469~1572)では野生由来の桜草の栽培が始まり、第2期の室町後期~江戸前期(天正年間~正徳年間:1573~1715)に幅広い社会層や地域で桜草が扱われるようになり、第3期の江戸中期(享保年間~天明年間:1716~1789)では桜草の園芸品種化が始まりました。今回は、その続きを紹介します。

第4期 江戸中期~江戸後期(寛政年間~文化年間:1789~1818)

園芸品種化の第2段階に入ります。この頃から野生株の突然変異を選抜した園芸品種は姿を消し、種をまいて得た実生由来の品種に特化するようになり、第3期(1716~1789)より園芸品種化がかなり進みました。

『百花培養考』(著者:松平定朝、弘化3年(1846)自序)によると、「寛政ノ末に至り、漸ク優ナル花形現シ、追々、名花、奇芳、實生ノ園ニ現シ、親愛シタリシ・・・」とあり、寛政期(1789~1801)の末には、実生(種をまいて育った)由来の個体で優れた花形のものが出現していることが記述されています(図1)。

また、『櫻草作傳法』(著者不明、作成年代不明)には、天明(1781~1789)から寛政(1789~1801)の頃に実生(種をまいて育てた)由来の変り花作りに挑戦する人が増え、最も盛んになった時期であることが記載してあります。そして、下谷辺に住む辻 武助が文化元年(1804)の花盛りの時に実生由来の花の品評会を始め、この品評会では花の等級を6段階(1 無極、2 玄妙、3 神奇、4 絶倫、5 雄逸、6 出群)に定め、出席会員の投票によって順位を決めていたことも書かれています。この下谷の品評会が桜草の「連」(=同好会)の始まりとなり、そのメンバーの多くは旗本や御家人などの武士でした。その後、江戸では、築土連や小日向連など他の連も発足します。これらの桜草連から実生由来の様々な新品种が誕生しました。この期に作出され、現在まで伝わっているとされる桜草の園芸品種には、「楊柳の笛」、「銀世界」、「旭の袂」、「臥竜梅」、「駅路の鈴」などがあります。なお、この頃は園芸品種化が進んだと言っても、まだ平咲きや梅咲きが中心で花形や花色が野生個体の特徴に近く、花のサイズも小さいです。

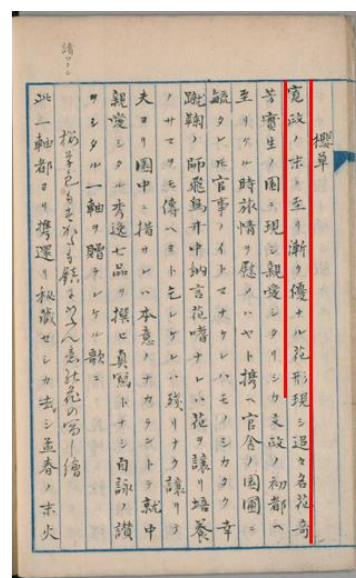


図1. 『百花培養考』の一部抜粋
赤線部は、本文と一致する箇所。

<国立国会図書館デジタルコレクションより引用>

第5期 江戸末期、幕末（文政年間～慶応年間：1818～1868）

園芸品種化の第3段階でさらに発展します。武士主体の桜草連の活動により、レベルの高い園芸品種が数多く作出されました。江戸では、武士主体の桜草連に属しない一般の人が桜草の「品種」を手に入れることは困難でしたが、この頃、多くの書物に桜草が登場しており、野生も含めて桜草は身近な存在でした。

この期には、数多くの園芸品種が作出され、最上の花は、大輪で丸くつぼんで下向きに咲き、花弁の裏と表で色が異なり、裏の色が表ににじみ出ないものが選ばれました。そして、江戸の武家へ

出入りし、桜草連が作出した品種の手控えである『桜草名寄控』（1860）を染植重（染井の植木職・二代目伊藤重兵衛）が作成し、この時までには210品種を記載しています。この他の記録として、『櫻艸花形附』（1833以前か）で約150品種、『櫻草花形帳』（1854～1860成稿か）で約30品種、『櫻草見立相撲』（1860）で約400品種が記載されています。そして、この期に作出され、現在まで伝わっているとされる桜草品種には、代表的な‘大力無双’や‘思いの儘’の他に、‘東鑑’、‘泥中のたま’、‘紫籬’、‘天晴’、‘二天四海’、‘玉光梅’、‘松の雪’、‘錦鶏鳥’、‘銀覆輪’、‘伊達男’、‘唐子遊’、‘唐縮緬’などがあります。

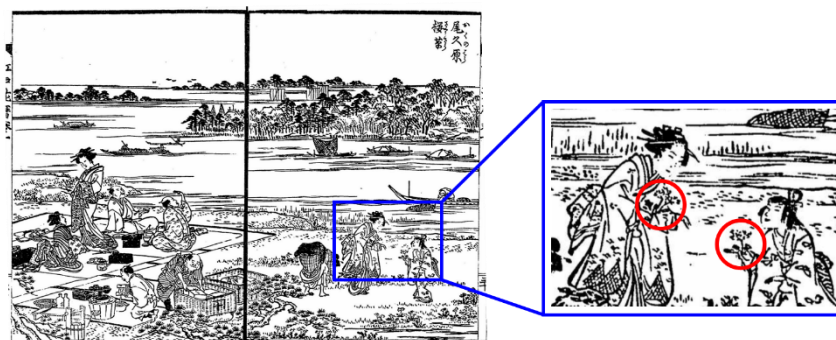


図2. 『江戸名所花暦』（1827、岡山烏著、長谷川雪旦画）に紹介されている桜草の名所、尾久の原（明治27年 博文館出版）
拡大図では、咲いている桜草を摘み、楽しんでいる人が見えます（赤丸は桜草です）。
<国立国会図書館デジタルコレクションより引用>

また、この頃、桜草は園芸品種だけでなく、野生も含めて楽しまれています。当時、人口が百万人以上だった江戸の町では、密集した町内に庶民は暮らしており、そんな彼らの楽しみが、寺社の参詣を口実にした行楽や四季折々の花見遊山でした。花名所の一つに桜草の自生地もあり、春先には荒川流域の尾久の原（東京都荒川区）へ野遊びに出かけました（図2）。また、町内では掘り取った桜草を売り歩く「桜草売り」の姿も見られ、一鉢4文で販売されていたそうです（図3）。当時、団子一串が4文でしたので、手軽に楽しめる鉢物（花き）だったと言えます。



図3. 江戸の桜草売り（狂歌『四季人物』1855、天明老人尽語 楼内匠編、歌川広重画）
<The Metropolitan Museum of Art (www.metmuseum.org)より引用>

参考文献：竹岡泰通著（2014）『桜草栽培の歴史』、創英社／三省堂書店

.....

次回予告 第266回くらしの植物苑観察会 令和3年5月22日（土）

「千葉県産ウメノキゴケ科地衣類」（千葉県立中央博物館 坂田歩美）

13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要